

第6章 にしあいづ物語100選

文化財の保存・活用を行う上で第一に重要なことは、すべての町民が町内の1つ1つの文化財に興味・関心を持つことが何より大切であると考えた。そのために堅苦しいイメージを払しょくし、親しみを持って文化財にふれてもらえるよう「個々の文化財＝個々の物語」として紹介することにし、物語の選定にあたっては次の3観点の中のどれか1つ該当するものであることとした。

- 一般的観点から文化財的価値の高いものである
- 西会津町の歴史文化を説明する上で欠かせない文化財である
- 地域で大事に保存・継承してきた文化財である

各地区で特に重きを持っていたり、町民には是非知ってほしいと考えられる物語(文化財)を「各地区5選」、地区をまたいでいる物語を「複数地区にまたがる物語」、これらには入らないが知ってほしい物語を「各地区的5選以外の物語紹介」としたので以下に記す。

第1節 各地区のにしあいづ物語5選

1. 野沢地区5選

(1) 化け桜と本海塙

江戸時代の野沢宿は越後街道三大宿場の1つとして繁栄を極めた。会津藩から六斎市を開くことが許され、新発田藩・村上藩・村松藩などの殿様が参勤交代の時には宿泊する宿場であった。十返舎一九が『越後路之記 金草鞋』の中で野沢宿の様子を次のように書いている。「ほどなく野沢の駅につく。塙屋という宿より留女出て引きとめければ、ここに泊まりて、『三味線の 野沢の宿は 旅人の 袖を無性に 引いてとどめる』」と他の宿場では見られない狂歌を詠んでいる。これは大山祇神社の門前町でもあったため、歓楽的賑わいがあったのであろう。こんな賑わいの野沢宿の陰に2つの悲しい話があった。

野沢宿内を通る越後街道は時代によって替わっている。これは最も古い時代の街道脇にあって、越後方面から来た旅人が野沢宿に入った目印にもなっていた桜にまつわる話である。

ある年の桜が満開の頃、宿場に売られてきた1人の娘が毎日の旅人相手の辛い勤めに耐えかねて、この桜の枝で首をくくって死んでしまった。哀れに思った村人は、娘の遺体を桜の根元にねんごろに葬ってやった。翌年、また春が巡ってきて、桜はいつものように満開となった。人々は満開の桜を見物にやってきて驚いた。なんと、桜の花はいずれも花の中から舌を出していたのである。その花の恐ろしさに人々は酷使された娘の怨念が桜の花に宿り、こんな花を咲かせたのだろうと噂しあい、それ以来この桜を「化け桜」と呼ぶようになったという。

幹も空洞化していて、中に狐が住んでいたといわれていたこの桜も、風雪に耐えていたが先年の大雪でついに途中から折れてしまった。今は折れた幹の脇から出てきた若枝が伸びている。次は、化け桜の話よりもう少し古く、野沢宿がほぼできあがりつつある頃の話である。宿場

にどこからともなく本海という行人(修験者)がやって来て、「宿場の火事を防ぎ、ますます繁栄するように祈って進ぜよう」といって祈祷を始めた。宿場の衆は火事がなくなり繁栄するなら願ってもないことと見守っていた。高灯籠を掲げ、祈祷も佳境に入った頃、今までなかった風が吹き出し、いつしか大風となってしまった。高灯籠が風にあおられ宿場の屋根に飛び火して、あれよあれよという間に火の粉が飛び散り、宿場は火の海と化してしまった。怒り狂った宿場の衆は、呆然と立ち尽くす本海を宿場はずれの田沢川を越した荒野に引きずり出し、生き埋めなどのむごいことをしたのでないだろうか。

それからというもの、やっと宿場を再建したと喜んでいると、毎年のように火事が起り、人々は苦しんだ。それで陰陽師に占ってもらうと、本海の怨念が成仏できず、さまよっている祟りであるという。宿場の衆はそれから毎年7月15・16日の夜、家ごとに高さ6間の高灯籠を掲げて、本海の靈魂を慰めたそうである。さらに禍転じて吉祥にするため本海を火防鎮火の聖人として壇を築き、「お聖人様」として崇めた。

『旧記書』(喜島屋山本定平著)によると、明和6年(1769)頃、田沢川火防聖人の塚は毎年8月18日にまつりや相撲・狂言・太神楽・念佛踊りが行われ、近村隣郷の人々が大勢集い、たいへんな賑わいであったという。いつの頃からか高灯籠や太神楽などはなくなり、奉納相撲だけが昭和30年代の初め頃まで行われていた。昭和初年頃は、触れ太鼓や新町の聖人様入口に組まれた櫓太鼓が打ち鳴らされ、近郷近在から集まった人で狭い本海壇は埋め尽くされ、出店も出て大賑わいであった。当時の相撲の様子や化粧まわしの写真が「ふるさと自慢館」に掲示されている。



往時の化け桜（平成26年撮影）



聖人様の本海壇の全景

(2) 如法寺と大山祇神社のいわれ

仏都会津といわれるようすに、会津は古くから仏教文化が栄えた土地であった。大同2年(807)、

徳一大師が磐梯山麓に恵日寺を創建し、会津に仏教の教えによる理想郷を作ろうと会津の各地にお寺を創建し、仏教を広めた。如法寺はその1つで、会津の西方に位置する当地は越国と陸奥国の境にあり、境を守護し、会津の西方淨土を守るためにどうしても必要なお寺であったのではないだろうか。如法寺は西部を治める修驗道場であったので、山の神と神仏習合の山として、また、淨土信仰の靈場として発展した。そのため観音堂の構造が変わっていて、東西に御拝口があって三方開き、四方に上がり口がある

日本唯一の觀音堂である。東から上って堂に入り、北の宮殿に向かって御本尊聖觀音を拝して西に出る。西の山には山の神が鎮座し、その彼方は西方極樂淨土である。この如法寺は鳥追觀音とりおいかんのんとして有名であり、これにまつわるこんな話が伝わっている。

時は天平2年(730)、芹沼という所に年老いた夫婦が田畠を耕して暮らしていた。ある秋の夕方、旅の僧がやって来て、「日が暮れて困っているので今夜一晩泊めてもらえないだろうか。」と2人に頼んだ。老夫婦は快く承知し、何もないが心からのもてなしをした。翌朝、僧は丁重にお礼を述べ、「何か困っていることはないか。」というので、老夫婦は「私たちには田んぼが数百畝あるが、ちょうど稻が実った頃になると小鳥がやってきて、みなついばんでしまい本当に困っている。それさえなければ食料に困ることはないのだが。」といった。僧は笈から小さな觀音像を取り出し、「この像に鳴菅を繋いで田の畔に置けば、鳥の害はなくなるだろう。」といって旅立った。老夫婦はいわれたとおりにすると、小鳥たちがきてついばもうとすると鳴菅が鳴るので、小鳥たちは怖がって近づかなくなった。それからこの田んぼを鳴沢田と呼び、肥料を与えなくてもよく実ったという。やがて老夫婦が亡くなると、觀音様は自ら大川(阿賀川)の淵に飛び込んだ。19年後の大同元年(806)、弘法大師と徳一大師がこの淵を通りかかると、觀音様は弘法大師の手のひらに移った。弘法大師は徳一大師によい場所にお堂を建てて安置するよういい残して旅立って行った。徳一大師は西平の方に瑞雲がたなびくのを見て、觀音堂建立の地とした。それからこの觀音様を「鳥追觀音」と呼ぶようになった。

また、山の神様(大山祇神社)の由来にはこんな話がある。宝亀9年(778)頃、大和国宇田(陀)郡宮崎の人で真海という法師(修驗者)が大久保の松原山の麓、地蔵屋敷(本社参道の弥作の滝の上)といわれる所に庵を結んだ。ある夜、真海の夢枕に三島明神が現れて「吾を松原山の山神として勧請せよ、さすれば吾を祈念する者には一代に一回は必ず願いを聞し召すべし」と告げた。そこで真海は心行滝(不動滝)で17日間の水行を行った。満願の朝になると、今度は大聖不動明王が現れ「汝の念願しばらく怠ることなれば、末世に至ってもこの山の神靈を祈る者には怪我過ち無く守るべし」と告げるので、真海は松原山に登って二夜三日の祈祷を行った。そして地を卜して祠を築こうとすると、杉の根方から五彩の幣帛へいはくが現れた。真海は歓喜して、翌年石龕せきかんを建て、御遷宮式を執り行ったという。この真海法師はその後いざともなく姿を消したので、里人は生國の宇田へ帰ったのであろうといい合って、松原山を「宇田(陀)帰山」と呼ぶようになったそうである。



如法寺觀音堂

なお、真海法師の生国と伝えられる大和国宇田(陀)郡には室生寺があり、修験道の始祖といわれる役小角^{えんのおづぬ}が開創と伝えられ、真言宗の道場である。如法寺と大山祇神社にはその昔、深い繋がりがあったのではないだろうか。



大山祇神社 遙拝殿（左）と本社（右）



(3) 研幾堂の偉人たち

① 渡部思斎

天保3年(1832)、野沢原町で旅籠を営む家に生まれる。8歳の時に父と死別し、盲目の母を助けていたが、聰明であったため、代官より若者頭を命じられる。その後、会津藩校日新館医学寮で学業を修め、「思斎」の医名と「渡部」の名字を名乗ることを許される。野沢原町の自宅に研幾堂医院を開き、私塾「研幾堂」も設け、法政・経済・文学・医学の4科を二百数十名にのぼる塾生に指導した。慶応2年(1866)、日新館医学寮の学監に招へいされたが、郷里の子弟の教育にあたりた



渡部思斎

いとこれを辞退。この塾から後述する明治黎明期の日本で活躍した多くの人々が誕生した。初代野沢小学校長を務め、県民会議員に当選して県令三島通庸に門下生の山口・小島・石川らとともに抵抗する。明治22年(1889)、県会議員立候補者推薦演説中に卒倒し、他界する。57歳であった。大正12年(1923)、旧研幾堂門下生によって顕彰碑が建てられた。

② 石川暎作

安政5年(1858)、野沢本町村肝煎石川家の三男として誕生。研幾堂で学んだ後、明治6年(1873)、高島英学校(脩文館)・慶應義塾・共立学舎で学び、千葉県の訓導を経て大蔵省銀行局に入所。アダム・スミス『富国論』とヘンリー・G・ボーン『泰西政事類典』の翻訳をはじめ、婦人束髪運動の提唱実践者として日本の学問・文化の振興などに大きな貢献をした。エコノミストとして政府の経済政策とペンで戦うが、結核が悪化し、同19年(1886)、28歳の若さでこの世を去った。顕彰碑がふるさと自慢館の裏にある。



石川暎作

③ 野沢雞一

嘉永5年(1853)、野沢原町村北分肝煎斎藤家に生まれる。慶応2年(1866)、研幾堂に学び、翌年、蘭学を学ぶため長崎に向かう途中の京都で山本覚馬と出会い、そのまま山本邸に住み覚馬から洋学を学んだ。薩摩藩邸の牢で覚馬の「管見」を筆記する。その後、脩文館に入学。後にエルル大学で学び帰国し弁護士事務所開設。明治32年(1899)、神戸地方裁判所の所長代理に就任。同37年(1904)、東京で公証人となる。昭和7年(1932)、80歳で没する。



野沢雞一

④ 渡部鼎

安政5年(1858)、思斎の長男として生まれる。明治6年(1873)、脩文館に学ぶ。同7年(1874)、東京大学南校(医学部)に入り、同10年(1877)、陸軍軍医試補となる。同18年(1885)、石川暎作と婦人束髪運動を起こす。同19年(1886)、カリフォルニア大学医学部に入学。同23年に帰国し、会津若松市大町に会陽医院を開き、同25年(1892)、野口英世の手の手術を行った。



渡部 鼎

近代医学に感銘した英世はそのまま書生となる。同35年(1902)、衆議院議員に当選。大正4年(1915)、帰国した英世と名誉の再会を果たし、昭和7年(1932)、東京で没した。享年74歳。

⑤ 山口千代作

嘉永元年(1848)、森野村肝煎の家に生まれる。研幾堂で学び、森野村戸長を経て明治11年(1878)に県民会議員になり、同13年(1880)には議長となる。同15年(1882)、県令三島通庸の会津三方道路開削反対のリーダーとして活躍。同23年(1890)の第1回衆議院議員に当選し、第2回・第3回総選挙にも連続当選する。その後、北海道で桑園事業、樺太で郵便輸送事業などと実業界で活躍し、同39年(1906)、58歳で波乱の生涯を閉じた。



山口千代作

⑥ 小島忠八

安政3年(1856)、野沢原町の豪商の家に生まれる。10歳の時に研幾堂に入る。明治5年(1872)、16歳で野沢原町村戸長となる。同10年(1877)、東京曙新聞社に入社。同15年(1882)、県議会議員となって会津三方道路開削に抵抗し逮捕されるが、無罪となる。その後、トテ馬車の野沢－若松間運行・中牛馬会社(運送業)の経営や養蚕講習所を自宅に開いたりして地方振興に尽力し、大正11年(1922)、66歳で没した。



小島忠八



(4) 八蛇沼の大蛇と弘法大師

野沢の街の西5kmほどの所に下安座・関根・水沢の3つの集落からなる安座村があった。春や秋の安座は別世界に来たように黄緑や黄・赤の急峻な山々に取り囲まれる。このような景色のためか、あるいは地形上からか安座にはこんな話が伝わっている。

昔、安座は周囲10kmほどもあったかと思われる大きな沼であった。やしあぬま八蛇沼である。この沼には180mほどもある雌の大蛇が住んでいた。この沼と大沼郡金山町の沼沢沼とは通路で繋がって

いて、沼沢沼には雄の大蛇が住んでいた。沼沢沼の大蛇はこの通路から時折、美しく織り上げた織物を流したり、また、この通路を使って往来したりして2匹は逢瀬を楽しんでいた。宝亀年間(770~781)、突然大地震が発生し、沼の一角が崩れ、満々としていた水が瞬く間に流れ下ってしまった。すっかり水がなくなった時、崩れ落ちてきた大岩の下敷きになった大蛇は、もがき苦しみながら沼の底で死んだのである。一説には水のなくなった沼から近くの尾多返山に巻きついて死んだともいわれており、尾多返山をその後、「竜岳」と改めたそうである。

大蛇が死んでから、沼近くの沼岡村の人達は原因不明の病にかかり、死ぬ者が多かったという。ちょうどその頃、如法寺に足を止めていた弘法大師がこのことを聞きつけ、急ぎ八蛇沼にやってきた。3日間、岩屋の洞窟に籠り護摩を焚き、大蛇の骨を拾い集めて地中に封じ込め、塚を築きおさめてからは大蛇の祟りは止み、疫病から逃れることができたという。

弘法大師は護摩を焚いた洞窟にお堂を建て、己の木像を彫ってこのお堂に安置し、「我、この地に末代安座する也」といわれたことから沼岡村を「安座村」に改めたという。

沼沢沼に通じていたという「大清水」という清水がつい最近まであったそうで、この清水をかき回すと大雨が降るといわれ、洪水を恐れて村では固く禁じていた。それでも日照りの年には近隣近郊の村人たちが安座の人たちの目を盗んでかき回し、雨を降らせたことがあったそうである。この大清水にはたくさんの魚がいて「沼沢の魚」と呼び、昔から捕ることは禁じられていた。

また『新編会津風土記』では、八蛇沼のことを次のように書いている。昔、この所に八蛇沼といいう大きな沼があつて八頭の大蛇が住んでいた。上野國の赤城山の神と下野國の二荒山の神とが中禅寺湖の境を争った時、二荒山の神が越後国蒲原郡鹿瀬組実川に住んでいた猿丸に赤城山の神を射倒すことを頼んだ。赤城山の神が百足となって現れたのを猿丸が射倒した時、その百足の靈がこの沼に移ったため、八頭の蛇は大沼郡大石組沼沢村の沼に逃げたという。その後、地震があつて岩が崩れ、この沼が埋まった時に長さ30mほどの百足は死んだ。よってその辺に村を開き、沼岡村と名付けたが、神靈が村人に祟りをなしていた。大同3年(808)に空海がここに来た時、神のお告げで残っていた水を抜き、百足の靈を宮岳という山上に封じ込め、骨を集めて1つの塚を築き馬茲塚(ヤスデのこと)と名付けた。八頭の大蛇を竜岳に封じて護摩を修めてからは祟りは止んだという。今でも安座集落の者は日光山に行っても二荒神を拝むことはない。また、山中に宿泊しないのは赤城神のことによるという。



現在の安座集落

(5) 大槻太郎左衛門政通の乱

野沢本町の遍照寺は、もとは会津坂下町洲走にあったそうだが、いつ何の理由で移ってきたのか分からぬ。この寺は如法寺住職の隠居寺との話もある。そもそも、ここは大槻館という中世の城館跡で、延徳年間(1489~1492)の頃、伊藤長門守盛定という地頭が住み大槻氏を称したと伝える。盛定はもと安積郡成田(郡山市成田)の人らしく、なぜ野沢村に移住したのかは不明である。

会津の盟主芦名盛氏の頃、大庭太郎左衛門政通まさみちという者がここに住んで、大庭を改め、大槻と称した。大槻太郎左衛門の祖先は佐原十郎義連の孫の北田次郎広盛の次男大庭河内守広連と伝え、4代大庭太郎次郎政隆まで北田に住み、300貫文の地を領していた。その政隆の時、反逆の疑いで100貫文に減らされ、これを恨み、その子大庭上総ノ介政泰が一族を挙げて反抗するが、一族は討死する。この時、政泰の長男大庭太郎左衛門国通だけが加わらず、国通から4代の大庭太郎左衛門政通の時、「上を蔑ろにする」という理由で30貫文の地(『会津鑑』では野沢原町・上野尻・荒久田、『新編会津風土記』では野沢本町・野沢原町・茅本とされている)に蟄居させられる。

太郎左衛門は大槻館に数年いたが、空堀はあるものの守りに弱く、手狭であったため、守りの堅い荒井館に移る。荒井館主の荒井氏は芦名家重臣であったため、城下に居を移し、館が空いていた。荒井館は西を湿地、東を断崖、南と北を空堀で守る規模は小さいが、堅固な館であった。この館に移って3年後、下野尻・小島・夏井などの地頭らの力を借り、越後の上杉謙信の加勢を受けて、芦名盛氏に積年の恨みを晴らす企てを娘婿の西方村地頭山内右近と練っていた。右近は山内本家に次いで力のあった川口村地頭川口左衛門佐を味方につけようと密書を盲人の斎竹という者に持たせたが、斎竹は雪で転倒し密書を落としてしまった。この密書は通りかかった土地の者に拾われ、盛氏のもとに届けられた。盛氏はかねてから太郎左衛門が右近と企てをするかもしれないと考え、金白加賀守景良に繩沢村近くに館を築かせて動静を見張らせていた折であったから、盛氏はすぐさま片門の渡しに平田是亦・佐瀬不及・富田美作・伊藤大膳を向かわせ、自分も金上兵庫・生江大膳・松本左衛門・新国上総らを率いて、柳津の渡しに出陣した。

これを聞いた太郎左衛門はかねてから同心していた下野尻の薄・小島の成田・夏井の赤城等の地頭と急ぎ片門の渡しに、右近も柳津の渡しに出陣。天正6年(1578)2月13日のことであった。太郎左衛門と右近らは只見川の険阻な川岸



遍照寺（大槻館跡）

で備えを固め、手勢は少なくとも、散々に弓矢合戦をして2日ほどは持ちこたえた。しかし、元来微勢の山内勢は柳津の渡しを守り切れず盛氏勢の渡河は時間の問題となった。これを聞いた太郎左衛門は片門の渡しは薄・赤城らに任せ、成田とともに自ら塩峰峠(藤村)を越えて救援に向かった。15日、援兵が到着しない山内勢はついに敵の渡河を防げず右近が自害。これを知った太郎左衛門は、一族郎党30余人と山道を越えて山内の領地上條から大山越えで越後に逃れようとしたが、大雪のため道もなく、空腹も重なり種子池淵たないけばちという所の洞窟に身を隠して雪が止むのを待った。そこへ猟師が通りかかったので、太郎左衛門はこれ幸いと飯と草鞋を頼んだ。しばらくすると手際よく調達してきたので、謝礼として判金一枚を与え、上條へ道案内をすれば恩賞を与えるといったら、猟師は簡単に引き受けて帰って行った。太郎左衛門は猟師が来るのを心待ちにしていたが、突然鬨の声をあげながら川口左衛門佐の手勢が押し寄せてきた。多勢に無勢、ついに太郎左衛門一党は討ち取られた。

成田右馬允某(妻の説もある)の嫡子の妻が落ち延びた夫の所へ行こうとして下牛尾の村はずれに来た時、金白勢に見つかり討たれたという。『大槻家浮沈録』では芦名氏に誅されたのは大槻太郎左衛門行綱で、乱を起こしたのは嫡子行久と伝えている。

1. 野沢地区 5選 参考・引用文献

- | | |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1)『新編会津風土記』 1809 | 7)『西会津ふるさとの伝説』 1985 丹藤明 |
| 2)『西会津史談 第7号』 2004 西会津史談会 | 8)『会津鑑』 1981 |
| 3)『旧記書』 1769 喜島屋山本定平 | 9)『西会津町史 第2巻』 2009 西会津町史刊行委員会 |
| 4)『西会津史談 第6号』 2003 西会津史談会 | 10)『西会津史談 第3号』 2000 西会津史談会 |
| 5)『鳥追觀音略縁起』 如法寺 | 11)『安座部落の伝説』 長谷川謙吉 |
| 6)『越後路之記』 十返舎一九 | 12)『西会津史談 第5号』 2002 西会津史談会 |

2. 尾野本地区 5選

(1) 龍藏寺の由来と薬師堂の子育石

龍藏寺は、慶雲4年(707)に越後国村松生まれの円心が蟻川庄木本村(今の萱本)に来て、草庵(尻平沢開山堂)を建て、太子像を安置したのが始まりである。

天平3年(731)4月7日、行基僧正が萱本村に来て、円心の草庵に泊まった。その夜、2人の夢に蓮台に座られた薬師如来が現れ、「インドから興照菩薩が日本に渡り、薬師如来像を33体(66体とする文献もある。)作ったその1体が上総國の法興寺に安置されていた。大宝3年(703)に越州の僧がこの像を盗み、ここまで来たが、飢えと疲れで死んで、薬師如来像をこの山に捨て置かれ29年の歳月がすぎた。お前たち、早く小さな堂を建てて安置せよ。必ず火災病苦を取り除いてやる」と告げられた。2人はこの夢から覚め、山に登ってみると1尺2分ほどの如来像が萱草の中に置かれてあった。行基は自



分の袈裟に大切に包み、庵に帰った。このことを村人に話したら、みな集り、驚き拝んだ。

それから行基は別に同じ大きさの観音菩薩と地蔵菩薩を刻み、急いで2間4面の堂を建て安置した。山の形は伏した龍や象に似ており、南北に長い峯の山でありこの麓に1棟の寺を建て、「長岳山龍象寺」と名づけ円心が開山した。尻平沢開山堂に円心が開山されたときのものと思われる礎石と僧の墓石がある。

その後、何度か修復したが、大治3年(1128)

にて寺も堂も朽ち果ててしまつて、修復が困難になつたので、越後の塩沢生まれの僧惠玄が新たに堂を建立し、寺も長岳山龍藏寺と呼ばれるようになった。

それから、幾多の盛衰があったと考えられるが、永禄12年(1569)3月15日、安養寺6世功山寶作和尚が当寺を中興するとある。

裏山には子安觀音堂、薬師觀音堂があり、萱本集落だけでなく近郷の村々の信仰も厚かったという。その薬師觀音堂の後ろに子育石が鎮座している。この子育石には、次のような話が伝わっている。

昭和の初めの8月の祭礼の前夜、村人が酒を飲みながらお籠りをしていた。眠りについた夜更け、古老の夢枕に御仏がお立ちになり、「われはこの家の主である。これより南西の方10町の地に清流あり、その中ほどに埋もれたる『黒い石』がある。この石を祀り尊崇すれば、必ず幸福になるであろう」とお告げがあり、御仏の姿は消えてしまった。古老は夜の明けるのを待ち、寺の住職や村人たちと長谷川の岸辺を探したところ、御仏のお告げのどおり中河原地内に黒い石があった。掘りだしてみると、約800貫目(=3t)もある立派な石に一同は大変驚き、早速「子育石」と名前をつけて嚴かに入魂式を行つた。昭和6年旧暦12月8日の晴れた日に、降り積もつた雪を踏みしめ「祝奉遷、子育石」と大書した幟を先頭に、若者や村人150人あまりの奉仕で「子育石」は櫓で運ばれ、今の場所に安置された。この遷座作業に使われた長さ3mあまりの大櫓は村の棟梁齋藤一雄氏が作ったもので、櫓を引いた大引綱とともに、今も長岳山龍藏寺に大切に保存されている。



龍藏寺薬師堂

(2) 宇多河氏ゆかりの社寺と城館跡

松尾山真福寺は、寺伝によると天平元年(729)、行基の開基と伝えられる。鎌倉寿福寺の僧慈心が鎌倉幕府の御家人で松尾村の地頭宇多河信濃守の合力を得て、文永6年(1269)に荒廃した七堂伽藍を修復し、最盛期には末寺三十七を持つ大寺院であったが、天正年間(1573~1591)、伊達政宗の兵火に係つて諸堂を失い、廃寺となつた。

その後、曹洞宗の僧明岩が時の津川城主の力を借りて慶長19年(1614)に上野国白井の双林寺の末寺として再興したと伝える。

松尾神社も宇多河信濃守が京都の松尾大社から勧請した神社とされ、県内唯一の酒造神・医薬神として信仰のある神社である。神井戸の御神水は靈験あらたかで、江戸時代中期以降、福

島県及び新潟県の酒造元が参拝のうえ、種水として持ち帰るようになった。平成10年より上卯祭(お水取り神事)が再開され、県内酒造元が参列し、盛大に行われている。この他正月から半年間のケガレを祓い、残りの無病息災を願う夏越の大祓い茅の輪くぐり神事が例年6月下旬に行われている。神仏分離令以前は真福寺が別当を務めていた。

宇多河氏の館跡が真福寺の前の川向にあり、東西1丁余、南北40間。郭内は2段になっているが単郭式の館である。東と西に高さ3尺ほどの土塁をめぐらし、その外に幅1間の空堀があり土橋が残っていた。北側は松尾川に面する急崖であるが武者走りの形を残し、南と西に虎口があり、北の小道との出会い部分に自然石の石組が少し残っている。宇多河信濃守道忠の築館と伝えられるが築館の年代は不明である。



松尾神社の茅の輪くぐり神事

(3) 甲石と河童の伝説

甲石はその昔、八幡太郎義家が休んだ所といわれ、脣を置いたところ、高さ1丈8尺、周り4丈の大きな岩になったといわれていたが、会津大地震で鎌^{しころ}という所が欠けて今はその半分が残ったといわれている。後年、甲石の裏の岩山を剗り抜き脣神社として祀り現在にいたる。

この甲石周辺には、次のような河童の話が伝わっている。昔、甲石の石山にある飛觀音付近に、盲湧^{めくらぶち}と呼ばれる底が測りしれない深い湧があった。ある晴れた日の暮れ方、村の喜四郎という者が野良仕事の帰りに、湧の川岸に飼葉桶^{まぐさ}を置いて、馬に水を飲ませ、少し離れた所で秣^{めぐら}を刈って戻ってみると飼葉桶がひっくり返っていた。変だなと思い、元に戻そうとしたが動かない。困った喜四郎が仲間を呼んで力任せに引っ張ると、なんと中に赤ん坊のような不思議な生き物がへばりついていた。喜四郎たちは「なんだこれは！ 魔物だア、打ち殺せエ！」と叫ん



脣神社

で殺そうとした。するとこの生き物は逃げ回りながら「私は、この盲渕に住む河童です。決して悪いことはいたしません。ただ、この飼葉桶が欲しかっただけです。命を助けてくだされば、村の水難をなくします。私の力できっとやります。」と言うので、村人たちちは哀れに思い、河童を渕に返した。それからというもの、村が水害に見舞われることはなくなったという。

またある年、村が凶作で食べ物がなく、餓死する者さえいる始末でみんな困っていた。すると明くる年、山菜採りに行った村人が帰りにたまたま通りかかった神社の池で、たくさんの稻束が沈んでいるのを見つけた。糲不足で困っていた村人たちとは、その稻束の糲を持ち帰り苗代に蒔いた。秋になるとそれが黄金波打つ大豊作となり、村人たちの大喜びで「きっとあの河童が種糲を恵んでくれたに違いない」と河童に感謝した。その池は「種糲池」と呼ばれ、今も御穂神社の境内の隅に小さく残っている。



(4) 円満寺と観音堂・子育て地蔵・出ヶ原紙

① 円満寺と観音堂

寺称を縛日羅山円満寺(本尊不動明王)と号し、真言宗の寺院である。寺の創建についての詳細を知る資料はないが、伝えによると、鎌倉時代初頭の建久6年(1195)、慶觀という僧(横田村本城寺賢瑞の弟子)が伊北郷山入村(金山町)に建立後、伊豆ヶ原村(出ヶ原)に移したといわれている。『新編会津風土記』によると、円満寺観音堂は創建から141年後の延元元年(1336=建武3)、芦名盛員の内室が中先代の乱にて鎌倉で討死した夫と子を弔うのに、円満寺の境内に観音堂を建立したとされている。ただし、天保3年(1832)の古文書によると、延元元年以前に飛騨の工匠水口入右衛門によって建てられたとされている。この観音堂は後の文安3年(1446)と天正7年(1579)に修復、慶長16年(1611)の会津大地震で倒れ復興したものといわれている。

やがて観音堂は昭和41年(1966)、国指定重要文化財となり、昭和45年(1970)から1ヶ年余りを経て解体移転、修理を施した。移転前は集落中央の円満寺境内跡地にあったが、国指定により保存の観点から現在地に移築し、



円満寺観音堂

原形に復したものである。

国指定となっている建造物は、方三間、総檜材、茅葺の入母屋造り。内部は本格的な室町末期の唐様建築手法で、垂木が丸見えの化粧屋根裏、絵様くり形のある木鼻、大瓶束と大虹梁。中央には格天井に来迎柱、造付須弥壇、後方張出し厨子。外廻りは二軒本繁垂木、三斗組の斗共、粽型の総円柱。正面には明和3年(1766)に奉納された扁額と文政6年(1823)に奉納された鰐口がある。

② 子育て地蔵と紙漉き（出ヶ原紙）

移転前の観音堂近くに「子育て地蔵(根深地蔵・夜泣き地蔵)」がある。地蔵様は高さ1.5m、胴回り1.9mの自然石で、地底から出ていることから「根深地蔵」とも呼ばれ、夜泣きを静めさせるための地蔵様でもあり、子どもを育ててくれる子守り地蔵様である。

いつの頃からか記録はないが、明治生まれの方の話では物心ついた時はすでに語り継がれていて、子を産むとお詣りしていたという。「昔、むらに子だくさんの家があった。どの子も夜泣きする泣虫子ばかりで、家業の紙漉き仕事が思うようにできなかった。そんな中、妻は子ども等を残し、急に死んでしまった。残された夫は多くの子ども等を抱えて、嘆き悲しんだ。四十九日の法要も終り、以前から妻が信仰していた觀音様(円満寺觀音堂)に子ども等をつれてお詣りした。その時、今まで何もなかったところから地蔵様の形をした石がニョッキリと生えていた。これはきっと死んだ妻が泣き虫で困る子を持つ人の悲願を哀れと思し召されて、念力によって地蔵様を出現させてくださったのであろうと、赤い頭巾と赤いよだれ掛けを石にかけ、お詣りを欠かさなかったという。それを見聞きした地区民は、夜泣きする子どもや疳の虫を治したいときお詣りするようになった。」と語り継がれている。今でも赤ちゃんが産まれると赤い頭巾と赤いよだれ掛けを奉納して、子どもの無事や成長を祈願し、毎年正月の元日には家族そろって氏神社・觀音堂・地蔵様に必ずお詣りをしている。

さて、子育て地蔵の言い伝えの中で出てきた紙漉きだが、紙漉きの技術は7世紀始めに高句麗から日本に伝えられ、その後奈良時代には全国各地で紙漉きが行われたという。「出ヶ原紙」についてはいつ頃からという記録はないが、貞享2年(1685)の記録によると、慶長元年(1596)頃には会津地区で「出ヶ原紙」として大量に漉



子育て地蔵(根深地蔵)



かれていたという。古くは集落にまだ地名がなかった時代に現在の高知県西南部地方に移住し、紙漉き技術を得た者が伊豆の国から来て、紙漉き技術を伝えたという。後にこの地は「伊豆原」となり、現在の「出ヶ原」となったといわれている。

今でいう「出ヶ原紙」は商標登録品として当時その名も高く、広く商用にと売買された。特に会津藩では専用品として公用文書に使われたという。

出ヶ原紙は昭和40年頃まで漉かれていたが、時代とともに廃れ、今はその姿はない。地域の一大事業として会津各地で漉かれていた「出ヶ原紙」。作業そのものは寒中の作業とあって、かなり過酷であったという。

(5) "御蔵入" に隣接する黒沢地域の遺産

① 坂内利三郎と黒沢鉱山群の隆盛

坂内利三郎は、元禄3年(1690)9月に金山町玉梨の坂内家5代の次男として生まれる。家が貧しいため、滝谷(三島町)の庄屋、山ノ内吉衛門宅に奉公に行き、18歳で年期があけて家に帰るも、良い働き口もなかったため横田鉱山で働き、横田城主山ノ内氏勝との繋がりを持つ。利三郎は24歳の時に黒沢(鈍子岩鉱山)で働き、めきめきと腕を上げ、黒沢一帯の鉱山を支配して会津藩の財政確立に大きな貢献をしたとある。

坂内利三郎の遺書の中から、利三郎の事績をまとめると次のとおりである。享保6年(1721)、坂内利三郎は兄新五衛門と黒沢鈍子岩鉱山で働き始め、同11年(1726)利三郎兄弟は会津藩の江戸敷に赴いて金山奉行となり、長坂平左衛門に願って銅板10万3,500枚、一両につき銅板8貫200匁を請け負い、金子100両を受け取った。同12年(1727)、利三郎は会津へ下り、金山御役所より金子50両と米150俵を受け取り、日向倉鉱山を開発した。その翌年(享保13年(1728))に利三郎は姥沢・日向倉鉱山へ江戸職人多数を呼び寄せ、1ヶ月で釜数15(釜床屋は鈍子岩の西に拵えた)、毎月600貫余の銅を吹きたてる。享保14年(1729)には利三郎は銅板10万3,500枚を会津藩に納め、代金1,150両となる。後年、利三郎は鉱山の成功を記し、観音像2体を作り、1体を本家菩提寺の玉梨の常楽寺に納め、もう1体を黒沢坂内観音堂に納めて、山ノ内氏勝の墓も同じ場所に移すも、黒沢分は昭和31年の水害でともに流失した。

坂内利三郎のルーツを調べると、常楽寺にて利三郎兄弟の位牌と観音像を見ることができる。ほかに坂内利三郎と繋がりの深い西方鳴城主山ノ内氏信の父、8代山ノ内俊安、奥方の位牌も並んで安置され見ることができる。

大成坑跡は、昭和21年10月閉山まで300年続いた。大成坑は鈍子岩鉱山の大動脈的な存在であり坑夫の出入り、鉱内物資の運搬、鉱石の運搬などさまざまな役割を持つ一大坑道で、現在も300mぐらい落盤なく残っている。選鉱場跡は大成坑内から運ばれた鉱石を、まずウィンチで最上部に巻き上げ、次にクラッシャーで碎石したあと鉄ボ



黒沢鉱山跡

ールミキサーにてさらに砂状にし、振動板に流す。ここで鉱石とズリを分離するため、水と青酸カリ・硫酸銅・石灰・砂状になった鉱石等を泡状に流しながら鉱石とズリを分離する。昭和16年(1941)、鈍子岩鉱山も大手資本が入り政府から軍事産業の指定を受け、兵役に行かない男子が徴用され、全盛期には約400人、昼夜3交替で稼働していた。

昭和21年8月、終戦の後に閉山となり、300年続いた鈍子岩鉱山も閉じることになった。現在も当時の面影をうかがうことができる。坂内家の隆盛を物語る異聞として民謡「会津磐梯山」の歌詞の「会津磐梯山は宝の山よ」は「会津坂内さんは宝の山よ」が元歌という人もいるが定かではない。

② 黒沢杉峠

杉峠は越後街道の野沢から山口・牛尾・出ヶ原集落を経て黒沢に至るまで、西方街道から御蔵入に通じており、塩の道、そして生活の道でもあった。またこの付近は古くから五大金山と言われ、金・銀・銅・鉛などの採掘などで賑った地帯で、杉峠の存在とともに生活に欠かせない大きな役割を持っていた。杉峠金山で働く人たちが休む峠の茶屋もあり、いこいの場所として賑った。特に6月の大山祭や9月の秋祭など、西方の御蔵入の大勢の人達が杉峠を越え、五三八商店・吉野屋・橋本屋の茶屋・旅籠で一休みし、大滝経由で黒沢(笹峠)越をして、大山祇神社本殿にお詣りに行き来した。

昭和16年頃は戦争により黒沢の鉱山も軍事産業の指定を受け、中央資本も入り、兵役に行かなかった男子も強制雇用として、三島方面からも大勢通勤した峠でもあった。また峠をはさんで黒沢と三島町西方とは昔から縁故関係も深く、生活習慣も共通する点も多くあり、現在もその関係は続いている。

学校関係では明治21年(1946)に下谷簡易小学校ができると同時に黒沢分教室ができ、1~4年生まで学び、5~6年生は西方の学校まで6kmの道のりと峠を越えて通学した。横田鉱山と鈍子岩鉱山で坑夫達の行き來した峠でもあった。また野沢から馬車で黒沢まで運び、峠は西方の人達の駄賃取り(荷上人足)の越えた峠もある。昭和45年まで電報・郵便物・小荷物等は西方郵便局より配達されていた。

③ 大滝不動堂と面倉薬師堂

大滝不動堂は端村大滝の入口にあり、不動明王立像2体が祀られている。1体は、13世紀後半(鎌倉時代後半)から14世紀(南北朝時代)の制作と思われ、一本造りで内矧りはない。技法的には平安時代など古い時代によく見られる技法だが、会津地方においては鎌倉時代以降の仏像にもよく見られる。各部分を詳細に検討すると、本来の形を見よう見まねで模倣しているような印象を受ける。会津地方で不動明王像が造られる時期は鎌倉時代以降かと考えられる。かなりローカルな作風ではあるが、側面のプロポーションは安定感があり整っており、そこまで制作年代が下るとも思えない。作風・制作年代・信仰背景において、西会津町円満寺觀音堂の^{うちぐ}矜羯羅・制咤迦童子像に近似する。よって13世紀後半から14世紀、会津地方における造像と判断され、当時の会津地方の密教・修驗道の動向・不動明王信仰を考える上で貴重な作例である。

もう1体は、江戸時代の制作で、寄木造り、玉眼嵌入、彩色がある。前述の1体がおそらく、当初の本尊像(中世作)の保存状態が悪くなつたため厨子に納め、新たに造立した本像をその前

に安置したものと思われる。素朴な作風から、当地での制作と判断される。不動堂に置かれていた板の墨書には、享保2年(1717)に村が主体となって不動明王像を造立したとあるが、様式・作風から見て本像の制作年代と齟齬せず、この銘文の像が本像に当たるのではないかと考えられる。全体に素朴で地方色が強く、後ろ髪を長く垂らし渦を巻く髪型は独特である。

面倉の薬師堂は、文明11年(1479)、修驗者智光院の建之と『会津鑑』にある。江戸時代、蒲生氏が藩主だった時代の隠れキリストンと関係があるという説もあり、堂内に薬師如来像と子安觀音像(マリア像との説もある)が祀られている。一度火災にあっているらしい。

④ 宮林風穴(別名：宮林石・石ぼっこ・狸穴)

たかととやま
高刀山が慶長16年(1611)の会津大地震の際に山頂が崩壊し、その時崩れて堆積した岩々が露出している場所がある。いわゆる風穴となっており、夏は涼風、冬は温風が穴の底から吹き、特に冬はここだけ雪が積もらず、冬期間でも石は苔むしてかつ真っ青である。昭和40年頃までは風穴から吹き上がる真っ白な水蒸気は秋の天気を占う観測点となっており、まっすぐ上がるときは晴れ、途中で漂うときは雨と判断していた。周辺には石祠がいくつかあり(天神様・山の神様・愛宕様)、石灯籠には「文化九歳」(文化9年は1812年)の文字を見ることができる。



宮林風穴



2. 尾野本地区 5選 参考・引用文献

- 1)『西会津町史 第7卷』 2000 西会津町史刊行委員会
- 2)『萱本史』 2000 萱本ふるさとおこし実行委員会
- 3)『重要文化財円満寺觀音堂修理工事報告書』
1971 重要文化財円満寺觀音堂修理工事委員会
- 4)『西会津町の指定文化財』 1989 西会津町教育委員会
- 5)『西会津ふるさとの伝説』 1985 丹藤 明
- 6)『新編会津風土記』
- 7)『西会津町史 第6卷』 1991 西会津町史刊行委員会
- 8)『西会津地方の民俗』 1969 福島県教育委員会
- 9)『西会津歴史物語』 1971 西会津町

3. 群岡地区 5 選

(1) 越後街道と阿賀川の舟運

会津藩が当初、京・大坂へ物資輸送(後に、最も重要とされた物資は廻米)経路として考えたのは、阿賀川の水路を利用し、その当時発達してきた日本海沿岸航路から、敦賀あるいは小浜(ともに現福井県)に荷揚げし、陸路で琵琶湖・淀川まで行きそこから船で下ることであった。阿賀川においては津川より下流において早くより舟運が発達していたため、近世初頭より上流へ延長する改修工事が行われることになる。津川ー若松間の川筋には難所が多く、特に「銚子ノ口」は最大の難所となり、水路開削は容易なことではなかった。しかし、新潟港に北前船が入港し、西国地方の塩が大量に運ばれてくるようになると、塩輸送のため阿賀川はより重要性を増し、河川改修が継続的に行われるようになる。したがって、物資流通路としての越後街道は阿賀川舟運の補完的なものとして考えられ、津川ー若松間に早くから伝馬等が用いられたのも舟運への荷継ぎが目的であったと思われる。

参勤交代路としての宿場形態も不完全なもので、会津藩は津川港への陸継がはたせることができれば足りると考えたので、伝馬制度の完備などは必要なかったものと考えることもできる。

阿賀川の最大の難所として通船を拒んだ銚子ノ口の迂回路としての津川ー野沢間の駅継ぎは、特に重要であった。津川より野沢までは1ヶ月間上り・下りに分けた番割りとした駅継ぎを行っていた。この街道における駅順は、津川ー天満ー野村ー焼山ー福取ー八田ー宝川ー白坂ー下野尻ー上野尻ー野沢と結ぶ番割りが行われていた。理由については、番割りに組み込まれている村々は上・下野尻村を除けばいずれも山間地で水田が少なく、米穀が乏しい小村であり、伝馬及び駄賃馬にて荷継ぎに支障をきたさずに行わせるには必要な措置であったと思われる。この番割りによる駅継ぎへの不満がなかった訳ではないが、18世紀末頃より津川ー徳沢間の廻米通船が再開されると、上・下野尻より大量の廻米を直接駄送している。商人荷物もすべて陸路の津川ー野沢間ルートで輸送されたため、阿賀川の最大の難所であった銚子ノ口の迂回路として、荷継ぎに支障をきたすことがないように伝馬・駄賃馬共に確保することを最重要課題として宿駅制が確立され、駅継ぎが行われていた。

会津藩は新潟港で塩を買い入れ、阿賀川を船で津川まで運び、津川より各地へ直接駄送した。本来の駄送は駅継ぎで行うことが原則であったが、一部特定の地域については直接目的地まで駄送する方法をとった。駅馬とは区別され、「中追」あるいは「中追馬」といった。山三郷(現喜多方市山都町・高郷町、西会津町奥川・新郷)の中追が駄送できる荷物は津川までの米と津川からの塩と限られ、それも馬札(御札)を使用する制限付きであって、津川より上・下野尻の中ほど(中島渡し)で柴崎へ阿賀川を渡り、平明・木曾を通り北方(現喜多方市小荒井)に至る経路であった。柴崎より北方までを一般に「越後裏街道」といった。この裏街道は中追による駄送以外は禁止されていた。しかし、この裏街道は早くより抜け荷的に通る場合が多くなり、度々取り締まりをしているが、宿駅側は



現在の銚子ノ口

連合して何度も訴訟を起こし、取り締まり強化を願い出ている。

このように、商品の流通が拡大してくる中期頃になると街道の往来も盛んになり、駅継ぎ制の枠をはみ出す者が出てくる。また、大量の物資流通を支えるには多少のはみ出しを認めることが必要であったと考えられる。藩そのものが廻米輸送において、より合理的な方法を常に選択し、実行していることもあったため、結果的に「制道の弛み」となって現れたものであろう。藩は街道の合理的輸送をはかる立場より、訴訟に対して、駅継ぎ制の確保を優先したので、この後も訴訟が繰り返されている。宿駅や中追を持つ村々はともに山間にあり、田畠の収穫のみで生活し、再生産を続けることは不可能な状態であった。生活を維持するために、何らかの副業による収入の道を求めていく必要があった。その中で最も安定したものが「駄賀稼ぎ」であった。このため、宿駅側にとっても駅継ぎ業務の衰退は死活問題であり、容認できるものではなかった。しかし明治以降の交通網の変遷により、物流も形態が変わることになった。

(2) 上野尻遺跡に残る縄文・弥生時代の痕跡

以前から、上野尻の住民の間では「中学校の近くから土器・石器がたくさん出る」ことは有名な話だった。上野尻遺跡は上野尻字東林崎の阿賀川段丘の川沿いにあり、JR磐越西線上野尻駅の北西約300mに位置している。この遺跡は大正時代から「中空土偶」の発見地として著名であった。この遺跡は上野尻集落の西端部に広がっており、北側は磐越西線沿いの崖で区画され、その中央部を県道上郷・下野尻線が通っている。

最初の調査は昭和31年7月に県道西側の北端を中心に行われている。最初の発掘調査は鈴木啓氏が中心となった福島県立耶麻高等学校野沢校舎(当時)地歴クラブによるもので、完形土器・土偶・石器・土器破片等多量の貴重な収穫を得た。当時、上野尻の住民の間でもかなりの話題となつたようである。植物種子の付着した土器はこの調査地点の盛り土の中から発見されている。それ以来この土器は西会津高等学校に保管されていたが、昭和39年(1964)の新潟地震で破損してしまった。

それが福島県立博物館に移管され、後年復元作業が行われた。この作業の中で、1つの破片の内側部分に炭化した植物種子を発見することができた。この種子は、土器内側の表面内部0.2~0.5mm程度に位置しており、胎土に混入した種子が炭化した時に土器の表面が剥離



種子の顕微鏡写真
(写真提供：福島県立博物館)

し、露出したものと思われている。この種子は顕微鏡写真で観察できる限りでは、全体に紡錘形を呈し、左半部中央に一条の稜線とその両側に溝状の部分が見られる。その右斜め上には嬢状の細かなメッシュがあり、右半部は丸いくぼみが見られる。このような特徴はオオムギに特有のものであり、土器制作時にそれが混入したものと考えることができる。

(3) 五職神経塚と修験

① 五職神経塚

経塚とは、經典を書写供養して地中に埋めた施設で、仏の教えが衰えなくなってしまう「末法」の世の最後に出現する弥勒如来に經典を残し、造営者が死後阿弥陀浄土に生まれ変わることを願って、寺社の境内地や山頂などの神聖な場所に造られた。その構造を見ると、まず地面に穴を掘り、石などを組み合わせて小さな部屋を造り、その中に經典を入れた容器を納める形になっている。經典を入れる容器は經筒や經箱といわれ、それをさらに外筒や甕などの外容器に入れて納められることもある。埋納される經典は法華經(妙法蓮華經)が一番多く、素材は紙(紙本經)が大部分である。

経塚は、平安時代の貴族を中心に弥勒信仰と極楽往生の願いを込めて造営され始めるが、中世になると、武士を中心に現世の平安と死後の安樂を祈る目的で造営される。中世末期には「六十六部聖」といわれる廻国行者による経塚の造営が盛んになり、彼らに託した小型経筒が供養者の居所から離れた場所で発見される例が多数確認されている。江戸時代になると、庶民によって盛んに経塚が造られるようになる。寺院の僧侶などの指導によって、先祖供養や家内安全などの目的で村ごとに小石に經文を書いた礎石經が作られ、それを納める経塚が造営された。

五職神経塚出土経筒附石製外容器三口の県指定の理由書に「上野尻五職神地内の経塚で発見された。銘文によると、この経筒と外容器は廻国聖が全国の靈場をめぐって書写した法華經を納めるのに使用した。永正15・16年(1518・1519)の年号のある銅製経筒は全国的に古い例に属し、保存も良い。また約1年間の間に三口が奉納されるという特色もある」とある。この経筒は昭和26年7月に、地内の蟹沢坂下り口左側の家屋建築中に発見された。発見当初は筒内に屑のようになった經文が認められたが、今は失われている。永正15年銘の筒を例にとると、「石



五職神経塚の経筒及び石製外容器
(写真提供：福島県立博物館)

州之住人源心敬白」とあるので現在の島根県の六十六部聖が同地に廻国して埋納したことがわかる。こうした納経信仰は祖先縁者の追善供養や現世利益、あるいはあらかじめ自分の死後の逆修供養などのために行われ、室町時代には六十六部聖らが全国六十六ヶ所の靈場を巡って埋納するのが盛んになった。この時代、五職神地内には何らかの靈場があったものと思われる。

② 修験

川谷にはこの地方の当山派の袈裟頭、定蓮院があった。定蓮院の佐藤家に伝わる由来書(享和3年(1803)の「当社并支配下由来書上帳」他)によると、佐藤家の遠祖は佐藤忠信の次男、権之祐信吉とする。この信吉以後は社人であったが、応永21年(1414)に入峯修行した尊清のときから修験となり、三宝院門跡から会津当山一流頭巾頭の奉書を与えられ大学院と号したという。一方、寛文5年(1665)、官命によって尊慶がまとめた別当社羽黒大権現の由緒を語るなかで、天正6年(1578)、右衛門大夫という者が吉野桜本先達(当山派大先達桜本坊)の元で初入峯を果たし、大覚院と号したのが修験の初めと述べる。右衛門大夫は、尊慶の曾祖父である。当山派としての定蓮院の地位も高いもので、若松城下の喜見院、津川の胎蔵院とともに当山派山伏の触頭的存在であったが、延宝6年(1678)から会津領内の袈裟頭を仰せ付かり、その後、元禄4年(1691)、喜見院・胎蔵院とともに新たに袈裟頭を仰せ付けられ、幕末までその任にあった。

正徳5年(1715)、三宝院から山号(富祐山)と寺号(照谷寺)をもらっている。明治2年(1869)の「謹而言上」には「触頭照谷寺」とあり別当、社僧の廢止、神仏判然令で修験者が次々と復飾していくなかで、まだ、修験の頭役を担っていた。明治4年(1871)の「謹而言上」には「修験照谷寺」とあり、まだ修験であった。修験宗の廢止は明治5年9月であるが、定蓮院照谷寺は廢宗まで修験を続けていたと思われる。

近世までは多くの修験者が村で活躍していたらしい。しかし、明治以降は還俗して神官になったり、修験をやめてしまったりした人が多く、その数はかなり減ってしまった。



(4) 上野尻西光寺の宝物

西光寺は無量山といい浄土宗で、江戸増上寺の末山となっている。いつの頃にか、光源という僧が開基したと伝わるが、由緒は明らかではない。永正年中(1504~1521)に良然和尚の中興といい、往時は寺領も多く、規模の大きな古刹であった。慶長年間(1596~1615)に蒲生氏の臣、岡半兵衛重政がこの地を領するようになってから、所領を失ったという。

参道を山門より直線的にたどれば、その直線は本尊に至るのではなく、内陣左側に存在する1段高い座敷状の間と、本尊との中間に至ることになる。1段高い間の重要性が垣間見られることを考えれば、身分の高い人物、または為政者の居室または執務室が存在したとも考えられる。また鐘楼は客殿の東にあり、2間に1間半、鐘経2尺5寸、寛政8年(1796)、当寺26世運誉

が時これを鋤った。中門風の鐘楼で、参道が鐘の下を通り本堂に至る。140年ほど前、ここを通りかかったイギリスの探検家のイザベラ・バードもこの鐘の音を聞いている。第二次世界大戦中、この鐘は一旦供出されたが、終戦後そのまま返還されている。



① 紙本著色蒲生氏郷像

大正4年(1915)3月26日付文部省告示第56号をもって国宝に指定され、昭和25年(1950)の法改正によって重要文化財となった。画幅は縦71cm、幅39cmの小幅で、冠を被り黒袍を着した参議従三位の正装の坐姿である。図上に氏郷没後26年の元和7年(1621)に京都妙心寺の僧逸伝の贊文が書かれている。

「無量山西光寺縁起」によれば、蒲生秀行が領内巡見の際に同寺の本尊阿弥陀如来を拝観し、誰の作かと問うたところ、住職が淨澄と答えるところを誤って清澄と答えた。「清澄」は父氏郷の小字なので、秀行は非常に因縁を感じ、寺領50石と父の尊靈とを配してこれを祀ることを命じた。その後、慶長17年(1612)に秀行が没すると、秀行の臣津川城主岡半兵衛にその寺領を没収される。しかし翌年半兵衛が駿府において誅戮されたので、寺では旧復を訴え出たが果たされず、元和7年(1621)になって三代忠郷の諸老臣がこの氏郷の画像と和歌一首を贈ったとある。境内に2間四面の氏郷影堂があり、画像を掲げて日夜供養したという。現在も御影堂は寺の南側に存在し、氏郷像は福島県立博物館に寄託され寺にはないが、画像を納めていた厨子が残されている。

② 宝篋印塔

総高93cm、基底部一辺30cm。この塔は、寺の口伝によれば蒲生氏郷の菩提供養のために造られ、寺墓所に建てられていたという。蒲生家とこの寺との関係は深いものがあり、また真偽は別としても『会津合戦記』には文禄4年(1595)に氏郷が「四月より煩いに付き、八月逝去し給



紙本著色蒲生氏郷像
(写真提供：無量山西光寺)

ふなり。野尻村西光寺に今に御墓有。(中略)都にてむじゅうの煙となし奉りて、しこつとてひろひ野尻西光寺へ送られけり、今において此寺無免地なり。政宗、名有入々の墓へは印を立給ふ、今において山中に五輪あり」と記されている。

この塔の隅飾突起は中世の様式を示す垂直の形に立っていて、隅飾との間に蕨手状の渦巻き彫刻があるのが珍しい。いずれにしても江戸時代初期を下らない制作として氏郷の没年、および伝来の氏郷画像とを考え合わせるとき、この塔の存在はまた1つ「蒲生家と西光寺」のつながりを補強するものとして重要である。



宝篋印塔

(5) 屋敷の人形芝居と万歳

① 屋敷人形芝居

屋敷集落に秋田県の「猿倉人形芝居」の流れをくむ一人遣いの人形芝居が伝承されている。これを「宝坂人形(芝居)」とか「屋敷人形(芝居)」あるいは「屋敷のデコ芝居」など正在する。この人形芝居は、正月から3月までと田植え終了時から7月上旬までの農閑期に、各地を巡業して演じるのを通例とし、冬は主として新潟県の新発田市周辺で、夏は県内では福島市・郡山市・同湖南町、県外では栃木県・千葉県までも行って演じられた。たいていは毎年行きつけのところで興行にあたっては、その土地の青年会に前もって依頼し、社寺の境内や学校などに場所を定めておいてもらった。集落内や近郷では、正月などに行われる個人の祝いや学校・農協・敬老会などの催物のあとに演じられた。このようにして数十年前までは毎年巡業していたが、世情も変わり、その他の事情も加わって、今ではまったく演じられていない。

この人形芝居は文楽の人形のように多人数を要しては、地方の興行に不向きなので、少ない人数で行えるよう工夫された、片手で操る一人遣いである。操り方は、ぬいぐるみの着物の下から手を突っ込み、人差し指と中指の間に人形の首の串をはさみ、親指と小指に人形の両腕をはめる。この方法だと、人形の微妙な動きや感情の表現が容易にできるという。そして人形遣いは高さ1m～1.5mぐらいの幕の裏にかくれて立膝となり、左右の両手に1つずつ人形を持ち、たいていは1人で、登場人物が多い時は2人で瞬間のうちに人形や持物(持物のついた腕)を換えながら進めていく。台詞は全部人形遣いがいう。

楽器は、三味線・笛・すりがね(鉦)・太鼓(大胴・小胴)・拍子木の5種を用いる。これを4人か5人で分担するので、太鼓の2個はひとりで受け持ち、三味線と鉦は1人が交互に奏したりする。人形の感情の変化を表出する重要な役割を持つ拍子木は、囃子方の中で手が空いている者があたる。出しものは「三番叟」「初幕狂言」「中狂言」「大切狂言(または切狂言)」であった。

最後の継承者であった藤原氏はすでに亡くなっているが、生前、群岡小学校の児童に細かな指導を行い、音曲を除いて児童たちの手で公演の一部がで



屋敷指形 「貫徹和尚の手踊」

きるようになった。その後小学校の統合により現在は、西会津小学校「屋敷人形クラブ」として継承されている。クラブ員児童7名・顧問教師2名で、児童たちによる現代的な「創作出しあげもの」も作られ、地域住民の温かい応援のもと、学習発表会などで公演が引き続き行われている。

②屋敷万歳

会津一円に古くから正月の間、新年の祝を述べて歩く2人連れの廉付芸がある。これを総称して「会津万歳」と呼んでいるが、西会津宝坂の熊沢と屋敷の両集落にも伝わっており、それぞれ「熊沢万歳」「屋敷万歳」または両者と一緒にして「宝坂万歳」とも呼ばれていた。この地方は豪雪地帯であるので、冬は農作業はもとよりほとんどの仕事ができないので、古くから正月の間副業として万歳を演じ、地方を巡る人が多くいた。新正月には主として、いわき市・郡山市、県外では仙台市・新潟市などの都市部をまわり、旧正月になるとそれらの田舎や南会津一帯をまわった。いずれも万歳師どうしで大体の区域の割り振りが決まっており、その他とは顔馴染みのところであった。期間はともに10日から15日間くらいである。万歳が盛んであったのは終戦頃までで、それ以降は万歳師が年毎に減り、昭和44年の時点では屋敷の藤原氏など1～2組を残すだけになり、現在はいない。



3. 群岡地区5選 参考・引用文献

- 1)『江戸時代の流通 福島県を中心とした舟運と陸送』
1989 福島県立博物館
- 2)『歴史春秋55号』
- 3)『歴史春秋58号』
- 4)『家世実記10月25日の記録』
- 5)『旧会津の峠』
- 6)『会津の街道』 1985 会津史学会
- 7)『福島県立博物館紀要 第20号』
2006 福島県立博物館
- 8)『新編会津風土記』
- 9)『福島県立博物館 企画展 福島山岳信仰』
- 10)『現代思想 神道を考える』
- 11)『発掘ふくしま』
- 12)『雑誌 伊勢まいり考』
- 13)『西会津町の指定文化財』 1989 西会津町教育委員会
- 14)『会津街道・会津の宿場 その他』
- 15)『西会津町』 1956 西会津町教育委員会
- 16)『西会津地方の民俗資料』 1969 福島県教育委員会
- 17)『西会津町史』 1993～2009 西会津町史刊行委員会
- 18)『群岡地区の仏像・神像』